

令和3年度 学校評価 自己評価書(一覧)

評価基準 A—80%以上(良い) B—60～80%未満(まあまあ良い) C—40～60%未満(あまり良くない) D—40%未満(良くない)

園学校名 安田中学校

経営理念	○学校経営理念【主体的に学びに向き合い、仲間を尊重し、協働して新しい時代をたくましく生き抜く力を持った生徒の育成】 ※第3期高知県教育振興基本計画(改) 基本方針Ⅰ＝チーム学校の推進 同Ⅱ＝厳しい環境にある子どもへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 同Ⅲ＝デジタル社会に向けた教育の推進 同Ⅳ＝地域との連携・協同 同Ⅵ＝生涯学び続ける環境づくりと安全・安心な教育基盤の確保	○学校教育目標【みずから学び 共に未来を創りたくましく生きる生徒の育成】
------	---	--------------------------------------

項目	中長期経営目標	短期経営目標	短期経営目標の達成状況	自己評価	改善方策	関係者評価講評	関係者評価
知	<u>学びに向かう生徒の育成</u> 1【書く力、表現する力の育成】 〈研究主任〉〈【知】部会〉 <u>第3期県教育振興基本計画(改)※</u> Ⅰ1(1)(2)2(1)Ⅲ1(1) ※以下 基本計画	1ーア. 高知新聞「小社会」を活用し、言語活動の充実を図る。(初見の文章の要旨を捉える。) 1ーイ. 集中した朝読書を継続する。 1ーウ. コレ単の学習に全校で取り組む。 1ーエ. 各授業での振り返りの実施を徹底する。 1ーオ. 授業スタンダードに基づいた授業づくり、授業改善を充実させる。 1ーカ. クロムブックの利活用により、生徒の学びを支え、表現する力を育成する。	1ーア. 1・2年は継続して行えた。3年生は個人の時間として進路実現に向けての時間をもった。 1ーイ. ほぼ計画通りにできているが、学級文庫の利用や声かけ等で図書室の利用を促していく。 1ーウ. 計画通りにできている。 1ーエ. 各教科の特性を生かした振り返り活動の充実を図る必要がある。 1ーオ. 各チーム会を通して各教員が意識しできている。 1ーカ. 若手教員からベテラン教員まで、相互にクロムブックの使い方の教えあい、学びあいをすることにより各教科でクロムブックを用いた授業づくりが進んだ。	B	○各学級の状況が異なるので、どこも同じレベルで一律に同じ結果には至っていない。 しかし、短期経営目標の一つひとつの取り組みは、計画に沿って進めた。また、授業改善や授業づくりに向かう教員の意識はここ数年では一番高く、経験年数の異なる若年教員と先輩教員とが相互に学びあい、教えあうことが日常的になり指導技術も向上した。ICTIによる他校との交流授業(1年英語)も実現した。 ○教員の学びは、実践する授業の展開や授業の質に反映され、それがそのまま生徒の学びの質と学力向上に繋がるので、これまで同様、年度毎、学期毎に生徒の状況、実態を組織で分析・共有しながらより効果的な次の一手を組織で講じていく。	常に授業改善の意識を持ち、教育活動全体を通した指導力の向上に取り組んでほしい。 授業で生徒がICTを活用しながら発表したり、意見交流する場面が増えており良いと思う。一層の活用ができるよう教員のスキルアップを図ってほしい。 生徒同士で教え合う姿も見られ、教える側も教えられる側も理解が深まるなど良い取り組みになっている。	B
	2【家庭学習】 (学習研究部会)(各教科担当)	2ーア. 授業と連動した家庭学習を進め授業の理解を深める仕組みづくりと家庭学習の実施によるメリット(解答率の向上等)を体感させる。(全員)	2ーア. 全学年提出率が上がってきた。過去に、宿題を出さなかった生徒も提出した。全体に日々の家庭学習の習慣が身に付いてきた。	A	○教員の地道な粘り強い指導、助言が、宿題など提出率の改善・向上に繋がっている。次年度も実践を続け生徒の学力にする。	家庭学習の習慣が身に着いてきたのは先生方の根気良い指導の成果。家庭学習の量の差が学年間にあるようなので、学年に応じた分量について再確認をお願いしたい。家庭学習につながる授業での仕組みづくりを引き続き取り組んでほしい。	A
	3【安田町授業力向上シートの活用】 (教科間連携)(研究主任) 4【多様性に応じた支援】 基本計画Ⅱ2(1)Ⅱ3(1)	3ーア. 項目3「見方・考え方を働かせながら、自分の考えとその理由を明らかにして、相手にわかりやすく伝えることができている」を重点に置き、見方・考え方を働かせる活動を授業に組み入れる。(全教科) 4ーア. 講師を招聘(高知大松本秀彦准教授)し、UDに基づいた授業づくりを進める。(全員)	3ーア. 評価指標:肯定評価100%は達成できていない。生徒と教師の評価のズレが生じている。来年度に向けて授業力向上シートの文言の見直しを行い、授業改善にいかしていく必要がある。 4ーア. 巡回相談などで個別の支援の対応の仕方について学び、助言をもとに実践できた。	B	○評価のズレについては、生徒の評価は概ね高いが、教員は高くないことがある。教員は、授業者だけでなく、授業参観者の評価が入り厳しい評価となることもある。シートの文言の見直しも含め、授業者と参観者の視点のブレがないようにすることや、生徒の評価と突合せた時、課題と授業改善の余地がどこにあるのかを見極めていく。	1人1人の個性に応じた指導について関係機関と連携しながら対応の仕方について学び、実践に生かしていることが分かった。 生徒と教員の評価のズレは、「深い学び」についての見方や考え方を理解させることが必要ではないか。	B
徳	<u>道徳教育の充実</u> 1【道徳科の推進】 〈道徳推進教師〉〈【徳】部会〉 基本計画Ⅰ2(4)(5)	1ーア. 生徒が主題のねらいを自分事として考え、多面的、多角的な見方ができるような発問の工夫と授業展開の実践に取り組む。(全員、年間) 1ーイ. 生徒が主題のねらいを自分事として考え、対話できるような、発問の工夫と授業展開の実践に取り組む。(全教員、年間)	1ーア. イ. 計画通りに実施できた。授業については、学年団でさらに工夫をして、生徒の実態にあった発問や展開を考えていく。	A	○道徳授業の指導案も、内容項目を生徒にいかに関わり合いとして捉えさせるかといった視点も学年教員で練り合い生徒の肯定的評価を行っている。生徒は、自分自身に向き合い自身の考えを仲間と深めあうことができている。	授業づくりに向けて計画的に取り組んでいることがわかった。道徳参観日の設定など、道徳教育の推進がなされている。継続して取り組んでほしい。	A
	2【道徳意識調査】 基本計画Ⅱ1(1)Ⅱ1(3)	2ーア. 生徒への肯定的評価と活躍する場面を多くし「全設問」の肯定的回答＝全生徒80%とする。 2ーイ. 「家庭で取り組む高知の道徳」の活用(全校研、学級)＝各学期1回以上	2ーア. 道徳授業チェックシート項目2は年間平均3.9であった。教師が意識して取り組んでいることは生徒も理解しているので継続する。 2ーイ. 意識調査項目3は年間の平均肯定的評価は35%であった。依然として課題が残る。活用の機会を増やしていく。	B	○道徳授業チェックシートの項目3「家庭で取り組む高知の道徳」の活用以外は、生徒の肯定的評価は県や全国と比較しても遜色ない。生徒は道徳授業にしっかりと向き合っている。項目3については家庭の協力を啓発し、継続して効果的な方策を探っていく。	「自分にはよいところがあると思う」「将来の目標をもっている」肯定的評価が当初より下がっている。思春期の段階で仕方がないところもあるが、数値が上がるよう取り組んでほしい。	B
	<u>不登校への総合対策</u> 3【いじめ認知、集団作り】 〈不登校対策担当教員〉〈生徒指導主事〉 (人権教育主任) 基本計画Ⅱ1(1)Ⅳ2(2)横断1(1)	3ーア. 生徒間の上下関係を作らない、一人ぼっちをつくらない学校を創る。(全教員) 3ーイ. QU実施による満足群割合＝各学期60%以上(各学年) 3ーウ. 11の人権課題に関して生徒の現状に応じて個別の人権課題の校内研修を実施する。(年1回以上)	3ーア. イ. 各学年で結果分析したことを教職員全体で共有したことで、支援に繋げていくことができた。 3ーイ. 学級満足群の割合は学年によって大きく異なるが、数値には表れない個々の成長が見られることが増えてきた。 3ーウ. 計画通りに研修を実施することができた。	B	○どの学年も概ね良好な学級経営、集団づくりができている。生徒個々の課題や状況を組織で情報共有し、報告、連絡、相談体制のもと校内支援会(企画委員会)で、課題解決の方向性を打ち出し対応している。生徒の成長は日ごろからの教員と生徒との関わる姿勢にも起因するので、より良い集団づくりを継続する。	学校として生徒の現状に応じて対応しながら取り組んでいる。 思いやりや友情、信頼など心を育む取り組みと集団づくりを更に進めてほしい。	B

体	健康・体力の向上 1【健康・保健教育】 (体育科)【(体)部会】(養護教員)(部活顧問)	1ーア. 平日 2 時間以内の使用 65%以上/全生徒 を目指す。(年間) 1ーイ. Step by step 等を活用し自らの健康管理や生活習慣に留意する生徒の育成を目指す。(年間)	1ーア. 達成率 72%であった。改善しきていない学年の家庭を含め啓発(家庭でのルールの設定等)を継続する。メディアについて保護者と生徒が一緒に学習できる機会を計画する。	B	○現代社会の中で、メディア使用のメリット、デメリットは表裏一体である。家庭におけるルール作りを毎年呼びかけており、生徒は防犯教室等でメディアについて学ぶ機会がある。保護者にも生徒と一緒にメディアの利便性の裏に潜む危険性や依存性に関する正しい理解を学習する機会を計画する。	各家庭のルール作りを呼びかけているが、できていない家庭が多い。継続して家庭への啓発に取り組んでほしい。	B
	2【体力・運動能力】 (体育主任) 基本計画 I 2(7)(8) 横断 2(2)	2ーア. 体力総合点の向上(評価E⇒D、評価D⇒C、評価C⇒B)を目指す。(年間) 2ーイ. 体育授業で運動の種類に応じた効果的な準備運動や体力づくり運動を実施し準備運動に体力測定項目を入れる。(年間) 2ーウ. 校内マラソンをゴールとして、全校ランニングに周回数やタイムの測定日を設け、自己の伸びを意識させ継続する。(年間)	2ーア. イ. ウ. 計画通り実施できた。運動能力では全体的に持久力に課題がある。授業時の補強運動で腹筋を取り入れる。全校ランニングでは、個人の目標を持たすことで意欲的に取り組む生徒が増えてきた。	A	○本校の運動能力は、例年、持久力など走ることに課題がみられる。本年度は全校ランニングで個人目標を持たせることで一定の時間や距離に意欲的に取り組む生徒の姿が多くなった。体力づくりに向けた体育授業での工夫とともに、全校ランニングを体力づくりに有効に機能させる方策を講じる。	全校ランニングの取組の甲斐があり、3年ぶりに駅伝も完走できた。今後も継続して取り組むことで体力向上の意識も高まっていくと思う。	A
	3【部活動】 (管理職)(部活顧問)	3ーア. 「安田中学校部活動に係る活動方針」を踏まえ、平日 1 日、休日 1 日の休養日を設定した月計画表を作成し、効率的・効果的な部活動経営を行う。(年間)	【部活動】 3ーア. 計画を踏まえた実施率 100%を継続する。	A	○健全な部活動経営を行い、生徒も教員も、気持ちのオン、オフと身体のオン、オフを使い分け、結果も残していきたい。	部活動が減って喜んでいる生徒もいる。効率的・効果的な部活動に向けて取り組んでほしい。	A
横断	横断的取組 1【学校・家庭・地域との連携】 2【安全教育・安全管理】 基本計画 IV2(2) VI3(1) II 1(1) 2(1)	1ーア. コミュニティ・スクール導入に向けた学校運営協議会の協議や助言を学校経営に活かし、生徒の学びと成長を目指す。(年間 次年度へ反映) 2ーア. 県指標を踏まえた防災学習(年間 5 回以上)、避難訓練(年間 3 回以上)を実施する。＝100% 2ーイ. 学校安全計画の点検と見直しを図る。(次年度へ反映)	1ーア. 総合的な学習の時間(1 年生、2 年生)等で地域人材を活用した。リサイクル資源回収は地域住民の協力があつた。 1ーア. 第 1 回学校運営協議会(5 月)の助言により第 2 回学校運営協議会(9 月)では教員の実践や生徒の取組を具体的に報告するとともに、継続して不登校傾向生徒への対応や学力向上について取り組む。 2ーア. イ. 計画は 100%実施した。避難訓練は生徒の振り返りや意見を踏まえ今回の訓練内容の設定に活かした。	B	○地域と学校が双方向で繋がる仕組み作りが必要である。学校運営協議会や地域学校協働本部等とともに協議しながら改善していけるように取り組む必要がある。	子どもの生きる力を育むためにも地域との連携を推進してほしい。町民運動会など地域行事への参加を促すような取り組み、学校から地域への発信等をお願いしたい。現在行っている参観週間の取組みは良い取り組みだと思う。	B
	3【不登校傾向生徒への総合的な対応】 基本計画 横断 I (1)	3ーア. 家庭及びSC, SSWと連携を密にし、校内支援員会を軸として丁寧な支援対応を行い、新たな不登校を出さない学校づくりを目指す。(年間)	3ーア. 組織内での連携及び保護者、関係機関との連携は欠かさず継続してきたが、不登校傾向生徒の各月の欠席日数の改善には至らず、また、家庭背景に重層的課題を持つ生徒の出席数が安定せず取組目標達成はできていない。	B	○数値目標としていることは、ここ数年変わりはない。その目標に向け、外部専門家(SSW 等)の助力も得ながら、生徒の「登校」を念頭に、支援や家庭との連携に切れ目がないように取り組んでいる。良い状況に繋がるように信じて粘り強く組織で支援を続ける。	不登校生徒へのクロムブック活用による取組も検討していったほしい。生徒や家庭との信頼関係を構築し、子ども目線、保護者目線で支援や働き掛けを続けていってください。	B
	4【働き方改革の推進】 基本計画 横断 I 2(1)(2) 5.【ICTを活用した新しい学びの構築】 基本計画 横断 I 3(1)	4ーア. 校務支援システムを活用した業務の軽減[ペーパーレス等](年間) 4ーイ. 正規勤務時間以外の在校時間の上限＝月 45 時間以内の教員＝100% 4ーウ. 運動部活動、文化部活動の運営の適正化、効率化の徹底を図る。(年間、全教員) 5ーア. 授業実践におけるICT活用率の向上(60%以上/年間授業時数) 5ーア. 協働学習ツールによる主体的・対話的で深い学びを実現する授業実践(全教員) 5ーイ. 授業における効率的なグループワークの展開(全教員)	【働き方改革の推進】 4ーア. 校務支援システムの活用や行事の見直しは定着と改善が進んだ。 4ーイ. ウ. ペーパーレスを含む日常業務の軽減、退勤時刻後の時間外在校時間(教科業務、分掌業務、担任業務、部活動従事)の改善、完全解消はできていない。 【ICTを活用した新しい学びの構築】 5ーア. イ. 若手教員からベテラン教員まで、相互にクロムブックの使い方の教え合い、学び合いをすることにより各教科でクロムブックを用いた授業づくりが進んだ。	A	○組織としての取り組みは近年では最も充実し、働き方改革やICTの利活用に対する教員の意識レベルは非常に高い。特に「公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン」を踏まえ、正規の勤務時間以外の在校時間における目安である「月 45 時間」を守る意識改革ができてきた。教員は見通しを持って計画的に業務を遂行しており、仕事の質が悪くなったということもない。学期の繁忙期や部活動の各大会に向けた集中した取り組み期間中の課題は残るが、教員の協働性の高い組織運営を今後も維持し、更に高められるように努める。	ペーパーレスなど働き方改革に向けて継続した取組をすすめてほしい。デジタル化社会において IT 技術を身に付けることは不可欠であることから、学校教育でもICTを活用した教育活動が行えるよう、教員のスキルアップを望みます。	A